いま伝えたい
――被爆者から

2015年・被爆70年
NPT再検討会議へ

〈15〉私たち世代が語り継いでゆく原爆のおそろしさ

横浜市　原田文子さん（90）に聞く

神奈川・金沢支部室の木班リズム小組リトモと若い世代のチームぐるっぽは、2回にわたり原田文子さんの被爆体験を聞きに行きました。その証言は、私たちには想像もつかないほどの壮絶な体験でした。

土の中から目だけが

19歳のとき、広島の爆心地から1・1キロの家で被爆しました。父と弟を送り出し、これから家事をと思っていたその時、ピカッと強い光が。空を見るとオレンジ色の火の玉がクルクルと落ちていく。その瞬間、ズドーンと大きな地響きと同時に、隣の三畳間に6メートルほど飛ばされていました。天井はぶら下がり、畳はひっくり返り、窓ガラスは粉々に割れ…ひざに大きなケガをしていたことも気づかず、ただただ立ちすくんでいました。

我に返り、崩れた家から出ると、「助けて、あんたは誰？」と、土の中から声がしました。隣のおばさんでした。おばさんの目だけが土の中から見え、助けようと必死にがれきをどけるのですが、どけてもどけても助けられない。救援隊を探しに行ったその時、突き出した両手の腕の皮が剥がれた娘二人が「怖いよ、お母さん」と泣き叫んで歩いてきました。この光景を目にし、急に抑えていた怖さがこみ上げ、一目散に家に戻りました。そして「おばさん、ごめんなさい！」そう言い残し、避難先に決めていた姉の嫁ぎ先へ逃げました。

道端で顔が焼けただれた中学1年生の男の子に「水が欲しいよ」とせがまれ、「水飲んだら死んじゃうから、ダメよ」と彼を抱きかかえ言ったとき、後ろにバーンと倒れこの手の中で亡くなった。水をあげておけば…と悔やみながら、また逃げました。やっとの思いでたどり着いた姉の家で父と弟を待ちましたが、帰ってきません。姉と街へ探しに行った三日目、父の働いていた県庁のそばでシカの絵のナイフと鎖、お弁当箱を見つけました。そばにあった小さな骨を拾って、泣きながら泣きながらお弁当箱の中に入れました。

この戦争に反対だった父。何を思って死んでいったのだろうか？　と今でも考えます。

弟は一週間後、頭に包帯を巻き戻ってきました。

学んで受け止める

しばらくしておばさんが生き残ったと聞き、意を決して一貫目の氷を風呂敷に包み、おばさんの元へ向かいました。髪の中にはシラミがわき、目はつぶれ見る影もなく…。「おばさん、ごめんなさい、許して…」と泣きじゃくりました。「えーけん、えーけん。この子（息子）でさえ、僕を先に助けてって言うたんやから…」の言葉に胸を突かれました。

人間らしくない言葉を言わせ、人間らしくない行動をさせるのが戦争であり原爆なのです。

今思うことは教育がいかに大切かということです。学ばなければ、今している行動が正しいのかすらわかりません。差別もたくさん受けてきました。でも乗り越えられてきたのは、いい人たちと出会いしっかりと学べたから。学べば人は強く生きられる。おばさんを置いて逃げたのも自分。それを受け止める、これからの生き方が、これからの自分なのです。

＊　＊

【お話を聞いて】この悲惨な体験、真実を風化させず、子どもたちに伝えていきたい。二度と原爆で苦しむ人がでないよう世界を変えていくことが、被爆国に生まれてきた私たちの役割です。原田さんの言葉「学びなさい。人に聞くだけではなく、みずから学んでいきなさい」を胸に、私は広島の原水爆禁止世界大会に参加します。（長嶋美波）

原田さん（左から3人目）を囲んで。右隣が長嶋さん